

# 『都市形成と建築家』

蓑原 敬 (都市プランナー)

コメンテーター：富安秀雄 (都市デザイン委員会顧問)

都市形成の世紀であった20世紀で、忘れられていたこと、うまく行かなかったことを踏まえて、21世紀の都市形成プロセスでの、建築家の役割を考えてみる。

## 1. 21世紀の都市形成の方向

### 1-1 都市形成の主体

これまでは、東京が中心で、モデルは外国、市民は啓蒙される側であったが、これからは、そこに住む人々が関与し、モデルを考えることで、都市が形成される。

### 1-2 ストックの時代

スクラップ&ビルトの時代は終わる。欧州では古い建物を大事に使っている。新築の3割以下の費用なら修繕する。これは古い建物を壊すと、廃材の処理が高価になったからでもある。古いモノを大切にす文化は、日本でも江戸時代にはあった。ニュータウンの再生でも、建て替えだけでなく、ストックの活用が考えられよう。

### 1-3 近代化の反省

20世紀には過去を見なかった。欧州では1930年代からの近代化が、1960年代には、風土や歴史、周辺環境等の無視の点で反省され、1970年代以降、この様な視点が一般化している。

### 1-4 今の生活の重視

20世紀は結果として、未来だけを見て、今の生活をどう楽しむかが考えられなかった。都市計画も、インフラづくりだけでなく、生活を豊かにする街(上部構造)が求められている。

上記の諸点が21世紀の課題として、先進諸国での流れとなっている。

更に加えて以下の3点が考えられる。

在来の社会構造はトリー型、或いはトップ・ダウン型であったが、今や暮しの場所、そこで人間関係が大切になっている。一方グローバル化の時代となって、欧州では国境を越えて、都市間競争が行われている。グローバル化時代の中で、それでは得られない大事なものとして、コミュニティ、町づくりがある。

ストックの時代を述べたが、ゴミを出さず、リサイクル、循環型素材といった、丁寧に物を使うことは、建設産業で考えると、作ることに、その維持保全を重視することである。ニュータウンの元祖であるイギリスの

ッチワースは、作られて100年。今もロンドン郊外で評価の高い住宅地である。それは地域環境を守ルールがあり、それが確実に守られているからである。100年の間には、住宅も建て替えられているが、建て替えの際には昔の図と照合しつつ、ルールに従って許可が必要である。ストック時代のモデルとも云えよう。

アメリカでも、住宅地には環境管理のシステムがある。アーバイン・ニュータウンでは、住宅地の管理費の方が、税金より高い。日本もこうなっていくと思われる。

歴史性等も加味し、自然・地形等の保護のルールも必要である。

日本にも、室町時代から近世まで、素晴らしい街があった。変化を凍結して活用する高山の様な方向は存在するが、一般にこうした街を現代に受け継ぐには、どうしても昔の街に、新しい建物を加える必要がありなかなかなか難しい。

1930年以降日本人の生活は豊になったが、街の空間への配慮は無く、又その反省も不足している。現在も依然として、美しくない街が作られている。……

木造建築の街と、近代建築の街との不連続性を、どう結ぶのか？ 困難な課題ではあるが、挑まねばならない。

東京の下北沢とか、吉祥寺とか、ゴチャゴチャしていて、違反建築だらけではあるが、魅力的で楽しい街がある。建築基準法を変えて、こうした街が、道は狭くても、防災的に安全となれば、存続できる様にすれば、21世紀の街になるのではないか？

## 2 建築家の役割

既述した日本個有の問題の解決には、100年かかるであろう。その為には、以下の三つの問題を解決しつつ、建築家が課題に取り組まねばならない。

日本は永い間築いた文明を壊して、列強と対抗する為に近代化し、和魂洋才と云って、外では洋服を着、家では浴衣を着ると云った二重構造でやってきた。しかし今の若者には、この二重性が解消しつつある。

日本は、近代化・効率化の為、お上が支配し、頭脳は中央で、地方は手足であった。1970年以降、地方分権が唱えられ、今やその具体化が進みつつある。都市計画法でも、中央支配が崩れ、開発許可も市町村に移っている。今後は個人が地域社会の中で、物事を、決める社会となる。主体的個人が求められる。

経済の二重性も解消する。豊かになる為、輸出入

などはグローバル化する一方、国内では保守的、社会主義的構造があった。しかしグローバル化は、国内にも及び、国内企業が海外に出たり野菜をはじめ多くの日常生活物資が海外から輸入されて、地方の衰退が起っている。一方安全で身近な食品を求めて、産地直売といった地域内流通が起っている。

グローバル化とローカリゼーションを同時に解くことが求められている。

建築家は欧米では、プロフェッショナルな地位で、医者や弁護士と同様に、社会的に尊敬され大事にされている。更に欧米では、建築は文化として評価されている。

...が日本では必ずしも同様ではない。1級建築士は沢山いるが、大部分は組織の一員で、直接建築に関係していない人も多い。建築家と云う名称も、明治以降日本で使われているが、かつては職人集団であった。

江戸時代には、建築家はいなかったが、街はちゃんとできた。まちづくりを考えると、建築とは一寸違う社会的しくみが、別にあるかも知れない。

ドイツでは、建築・都市責任者は、市長の次に偉い。最低6~12年の任期で、選挙で選ばれるのではなく連続して町づくりを行う。日本にはこう云うポストは無い。

街づくりには、いろいろなプロセスがあるが、大切な役割は3つある。仕掛け人が必要である。この人は夢を持ち、動機づけをする。仕掛けを受けて物を作る、つなぎ人が必要。どこかで決断して、まとめる人が必要。

夢を持つ人は、まとめきれないし、決断する人は、夢が無いと云ったことで、1人でこの三役はやれない。

又このプロセスで、どの段階にも空間のプロが必要である。つまり偉い人がいるだけでなく、それを具体化につなぐ、仕組みが必要なのである。

これから100年、どんな街を作るか。試行するしかない。社会的しくみは不明。どんな町がいいのかも不明である。木造の町にはイメージがあったが、RC造でいい町のモデルはない。

都市を作りデザインするしくみがない状況の中で、いろいろの人が試行してきた。それらの評価はこれからである。しかし試行しなければ、すぐれたものは生まれない。我々が気に入る空間をモデルとして作りそれが淘汰されていく中で、いい街ができるのである。

ケース・バイ・ケースで、建築家が介入し、いろいろ

の人の助けをかりつつやると思われる。

面白いのは、欧州に行った時、オランダのフェリックス・クラウス氏が、俺はアーキテクトではない。ビルディングを考えるのだと云っていた。又イギリスでは、ニューアーバニズムの旗手であるドウワニー氏が、私は建築家ではない、アロケーター(配分係り)である、と云っていた。

このように、我々はこの仕事は、ビルディングを考え、アロケーターをするわけであるが、それぞれが、デザインについて強い自負心を背後に持っている。

(このあとスライドの映写。.....これは、日本で何故いい町ができないかを示す資料であり、そのつもりで見たいと説明があった。写されたのは、日本の住宅の代表的なものとしての農家、お屋敷、田園調布の住宅など。更に町屋型式.....木造での街づくりとしては、素晴らしいものがある。続いて、マンションの例いろいろ。防災の点から第2次大戦後は、RC造の集合住宅、団地がいろいろ作られた。名古屋、茨城県の例などが示された。)